PROJECT

リプロダクションの自然／文化／人工

文・写真
松岡悦子

共同研究 ● リプロダクションと家族のオールターナティブデザイン──文化と歴史の視点から（2008-2011）

産む・産まないをめぐるリプロダクションにおいて、これまで女性は産む性・男性は産まない性と二項対立的に考えられてきた。しかし、最近のリプロダクションをめぐる状況を見ると、産む・産まないを女性と男性に割りふるのは必ずしも妥当ではないように思われる。性と生殖こそは男女の違いが最も鮮明になる場であり、異なる性による生殖を中心に家族が形成されるという考えは現在も一般的だが、そうではないケースも散見されるようになっているからだ。もともと文化人類学の分野では、レヴィ＝ストロースが紹介したアフリカの女性婚や亡霊婚の例に見られるように、異性間の性と生殖と家族の形成が一致しない例はいくらでも知られていた。そしてそのような形の結びつきは、西洋産業社会からすれば奇妙に見えるけれども、彼らの「文化」だとして受け入れられてきた。

さて、では現在日本や欧米で見られる多様なリプロダクションについては、「文化」として受け入れられているのだろうか。たとえば、不妊の夫婦が代理母に子どもを産んでもらうこと、同性どうしのカップルが人工授精や代理母によって子どもをもつこと、性転換して夫や妻になった人が子どもをもつことなどの他にもさまざまなバリエーションが考えられる。人類は性と生殖という自然を多彩に加工し、文化として実践してきたと人類学では考えるにもかかわらず、今自分の社会で起こりつつある多様な形を私たちが文化と見なすのを躊躇するのはなぜなのだろうか。文化とはもともと自然を変形させるものだが、新たな生殖技術を自然に反し、かつ文化でもないと見なすのは、自然／文化という対比よりも自然／人工の対比で考えているからだろうか。あるいは自分とは異なる社会には「彼らの文化」を見いだすけれども、自分の社会は文化フリーだと考えるからだろうか。また、リプロダクションが単に生殖だけの問題ではなく、多様な家族の形と密接に関わるために、両者をひっくるめて文化として位置づけるには時間がかかるということなのだろうか。ともあれこの研究会では、リプロダクションに多様な側面から光を当て、そこで見えてくる問題を可視化し、異分野の視点で議論することを目指している。

家族計画についての意見を述べあう女性たち。インドネシア・カリマンタン島。

自然／文化／人工

食べる、眠る、産むなどの人間の生理的活動は自然な行為で、同時に社会によって異なる形をとる文化的な行為だと言われる。しかし、自然と見なされる食べること、眠ること、産むことが必ずしも自然に行われないことは、ダイエットに励む人の多さや、不眠症に悩む人の存在、不妊や人工的な出産の増加などに表れている。このような事例に出会うと、これまで自然だと思っていたことが実はそれほど自然ではなかったのかもしれないと思われてくる。そしてこのような「不自然」には、現代社会では睡眠導入剤や眠る装置や生殖技術などの技術的な解決が図られることになる。リプロダクションに関して言えば、近代的避妊法や体外受精などの技術的解決は、リプロダクションの可能性と自由度を大幅に広げることになった。そして、そのような新しい技術は、先述したように文化とは見なされずに、自然に対する人工と見なされることが多い。そのように自然／人工として見ることで、自然／文化の対比では見えなかった生殖の前提が大きく揺るがせられることになった。たとえば、女性は産むのが自然だという前提である。

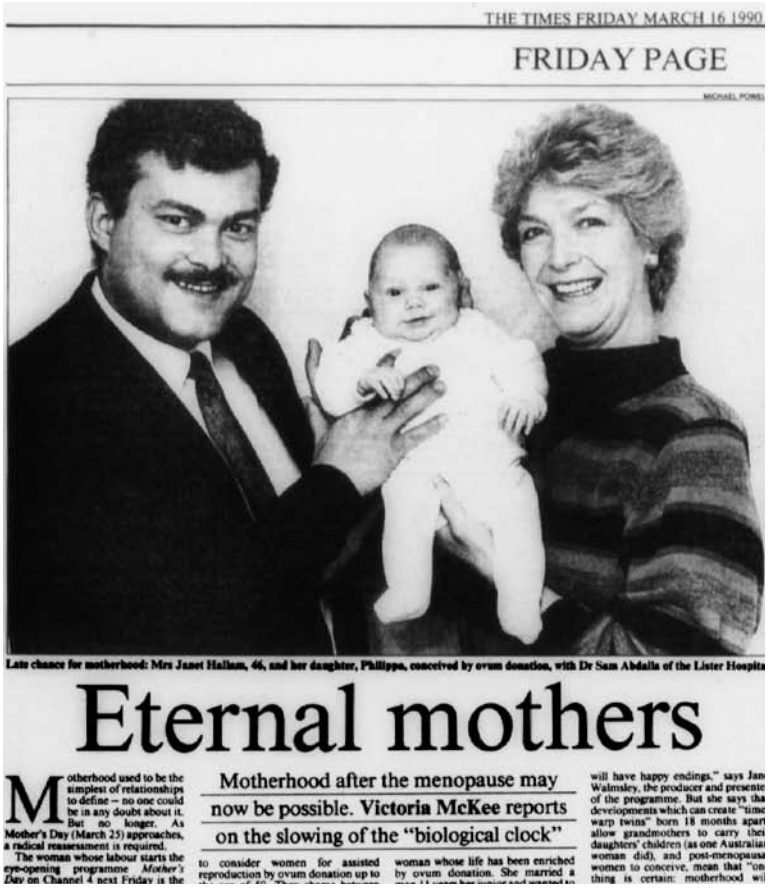
女性は産むのが自然か

果たして、女性は産むのが自然なのだろうか。たとえば、先進国の生殖年齢にある女性の大部分は現在避妊しており、もし2人の子を出産するとすれば、人生でたった2回だけ産む状態になるわけだ。また近代化途上にある国では、結婚前の女性の避妊率は低いが、婚姻後の女性には家族計画が行き渡っていることが多く、人生で産む状態になるのはやはり2、3回ということになる。私が調査をしたインドネシアのカリマンタン島で、女性たちに「もし家族計画政策がなかったら、避妊しますか」と聞くと、女性たちは「避妊をしない生活は考えられない。今のような経済状況で、何人もの子どもを産むことはできない」と述べていた。つまり、現代の女性は産まない状態にあることが普通で、わずかの時期だけ産む状態になり、それ以外の人生の大部分を男性と同じ産まない性として過ごすのである。

さらにもう一つの例をあげると、英国BBCラジオ放送が2010年7月28日に、“Childfree by Choice” という番組を放

送した。近年欧米で子どもを意識的に欲しくない女性たちの割合が増えているそうで、西ヨーロッパ全体でその割合は約20パーセントにもなると言う。かつては、子どもを欲しくないと言うのはスティグマになったが、今は避妊法もあり、社会的な圧力もなくなって産まない選択ができるようになった。だが、女性は子どもを産まないからと言って、子どもを嫌いなわけではない。アメリカでも子どものいない女性の割合は増加しているが、そういう女性たちをPANKS(Professional Aunt No Kids)と呼んでネット上のコミュニティーが立ち上がっている。自分の子どもはいなくても、おばさん(aunt)、お姉さん、ゴッドマザーとして甥や姪にプレゼントをあげたり、その子たちをかわいがっている女性はたくさんいる。自分で産まなくても、子どもと親密な関係になる方法はいくらでもあるというのである。

このようにリプロダクションが「人工」となることで見えてきたのは、これまで「自然」とされてきたことが、実は文化の側が作り上げた自然ではなかったかということである。女性は産む性、育てる性で、本能的に子どもをほしがるもので、女性の身体は産むようにできているという考えは、人工的なリプロダクションが可能となったことで支持されなくなった。自然と思われてきたことは、文化の側の期待でしかなく、「人工」を通して見ると「自然」はもはや自然ではなかったことになる。


THE TIMES FRIDAY MARCH 16 1990

FRIDAY PAGE

MICHAEL POWELL

Late chance for motherhood: Mrs Janet Hallam, 46, and her daughter, Philippa, conceived by ovum donation, with Dr Sam Abdalla of the Lister Hospita

Eternal mothers

Motherhood after the menopause may now be possible. Victoria McKee reports on the slowing of the "biological clock"

Motherhood used to be the simplest of relationships to define – no one could be in any doubt about it. But no longer. As Mother's Day (March 25) approaches, a radical reassessment is required.

The woman whose labour starts the eye-opening programme *Mother's Day* on Channel 4 next Friday is the

to consider women for assisted reproduction by ovum donation up to

woman whose life has been enriched by ovum donation. She married a

will have happy endings," says Jan Walmsley, the producer and presente of the programme. But she says tha developments which can create "time warp twins" born 18 months apart allow grandmothers to carry thei daughters' children (as one Australia woman did), and post-menopausa women to conceive, mean that "on thing is certain: motherhood wi

「永遠の母親」46歳のジャネット・ハラムと卵子提供により生まれた娘のフィリパ。隣の男性は夫ではなく、この生殖を可能にしたアブダラ医師(1990年3月16日のタイムズ紙より)。この写真は、家族を作るのが医療の文脈の中で行われるようになったことを示している。

医療との危うい関係

リプロダクションと医療との危うい関係は、生殖技術、出産への医療介入などとしてこれまでにもずっと論じられてきた。現代のリプロダクションは、妊娠・出産・避妊・中絶・不妊治療など、ほとんど全て医療の文脈で行われている。たとえば、革新的な生殖技術によって子どもが誕生したとき、赤ん坊と並んでメディアに登場するのは父親ではなく医師である。家族を作るのも医師であるかのように見えるこのような写真の与える影響は大きい。しかし、医療の持つ力が大きいゆえに、いったん不妊治療を始めたらやめることができないという問題点が指摘されている。医療を利用しているつもりが、いつのまにか医療に絡め取られて抜けられなくなることは、医療との適切な距離が難しいことを示している。

また、現在の出産の場で疫病のように広がっているといわれるのが、医学的に必要のない帝王切開である。帝王切開は医療費を押し上げ、手術による医療廃棄物を排出することで地球環境に負荷を与え、母児の健康に良くないにもかかわらず、出産法の一つのようになっている。しかも、帝王切開が産業化途上にあるアジアや南米の女性たちに多用されている事実は、医療が潜在的にもつ暴力性や危険性を示していると考えるなら、リプロダクションと医療の危うい関係を検討する必要があるだろう。

政治としてのリプロダクション

リプロダクションや家族にかかわる事柄では、いろんなアクティビストが登場する。婚外子差別をなくす、夫婦別姓を進める、自然出産をめざす、同性婚、中絶の容認、ステップマザーの権利など。なぜ、リプロダクションに関することがらが運動を呼び起こすのだろうか。それは、リプロダクションが大きな権力の作用する場であり、既存の秩序とそれを変えたい人々との闘争の場になっているからだ。リプロダクションとそれが作る家族には、権力、価値観、感情、財産、宗教など多くのことが負わせられている。したがって、リプロダクションを議論することやそれに変更を加えることは、多様な立場の人たちからの同意や反発を招き寄せることになる。

今後の展望

このようにリプロダクションは、家族をスタートさせるイベントであり、かつ家族の存在理由の根幹をなすできごとである。それゆえに、そこには文化の規範や医療をはじめとするさまざまな権力が働いている。それらを可視化させ、将来に向けて人権が保障されるような形で家族とリプロダクションのあり方を考えることが本共同研究の課題である。そのためには、現在リプロダクションに関して起こっているできごとを理解するための新しい概念を手に入れなければならないだろう。

まつおか えつこ

奈良女子大学教授。専門は、医療人類学・文化人類学、リプロダクションの比較。編著に『産む・産まない・産めない：女性のからだと生きかた読本』(講談社 2007年)、論文に"Maternity Homes in Japan: Reservoirs of Normal Childbirth"(R.Davis-Floyd, L.Barclay et al. eds. *Birth Models That Work*. University of California Press, 2009)など。